

## 昭和30年代前半の結婚儀礼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤, 泰三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/31233">http://hdl.handle.net/2297/31233</a>

## 14. 昭和30年代前半の結婚儀礼

北澤 泰三

1. はじめに
2. 三郷地区における結婚式当日の流れ
3. 昭和30年代前半の結婚式
4. 事例の比較・考察

### 1. はじめに

結婚は、結婚する当人たちだけで完結する問題ではない。両家の親族はもちろんのこと、所属する地域社会にも関係する大きな行事である。とくに一昔前の結婚は「嫁をもらうことは、息子との婚姻、夫と妻という関係より以上に、婚家という家にとっての労働力を得ることと、家永続のための子孫を得ることであった」（大藤 1985:377-378）というように、現在よりももっと「家観念」が強く反映されたものであった。

今回、珠洲市若山町三郷地区を調査するなかでお聞きした結婚式に関する事例の多くは昭和30（1955）年から50（1975）年にかけてのものであり、その中には『珠洲市史 第4巻 民俗編』（1979）に描かれている戦前・戦後の風習が多く残っていた。本章は、とくに昭和30年代前半に結婚された4軒（出田地区2軒、鈴内地区1軒、広栗地区1軒。いずれも昭和30年代前半に結婚）の結婚式の事例を比較し、考察するものである。以下、第2節では、今回の調査データや『珠洲市史』を参考として、三郷地区で行われていた結婚式の大まかな流れをまとめ、第3節では各家において行われた結婚式について詳しく記述し、第4節で各事例の比較・考察をする。

### 2. 三郷地区における結婚式当日の流れ

以下に、今回の調査内容と『珠洲市史』とを参考とした結婚式における大まかな手順をまとめた。今回の調査で特に結婚式について詳しくお聞きしたお家は、4軒ともに婿入りではなく嫁入りであったので、嫁入りについて記述する。

## 嫁迎え

結婚式の当日、仲人などが花嫁を迎えに行く。仲人は「家族成員の婚姻配偶者の選択は、親（家長）の意をうけた仲人にゆだねられた。この仲人には、職業的にこれを行う者も稀にはいたが、一般には当事者の家と親しい者が好意的に仲介の労をとった。（中略）仲人は、「草鞋三足履きつぶす」と俗に言われたように、縁談がまとまるまで幾度も両家を往き来するのが普通だった」（江守 1984: 357）という記述にも表れるとおり、結婚という儀式に関しては、かなり重要な役割を担ってきた。花嫁の家（もしくは髪を結った場所）まで迎えに行く人は、仲人のほかにネカヅキ（荷担ぎ）・ムカエニョウボウ（迎え女房）といった役職名がついていたところがあった。今回お聞きしたなかでは、このネカヅキとムカエニョウボウとは女性の場合が多かった。ここで、迎えに来た人たちがご飯をご馳走になることがある。これを『珠洲市史』では「ハバキヌギの御膳」と表している。ハバキヌギの御膳にのっている料理に関しては、4種類ほどの簡素なものから二の膳が用意されるほどの豪華なものまで、地区ごとによってまちまちであるようだ。

## 嫁の出立

今回お話を伺った家々では、白無垢に角隠しといういでたちで家を出たという方が多かった。これについて詳しく伺ったところ、花嫁が一旦生家で死ぬということを表しているようで、死に装束を意識したものであったようだ、と教えていただいた。

嫁の出立は、今回お聞きした家々では、昼から夕方にかけてと明るい時間帯に行われたものがほとんどであったが、出田地区のある家では、午後10時～11時頃に嫁が実家を出たそうで、「今日のうち（午前0時）までに嫁に行くものである」とされていたようだ。『珠洲市史』では「夜、こっそりと、なるべく人の通らないような田んぼ道を通る花嫁行列である。じっくりと見なければ、花嫁の一行とは気がつかないだろう」（1979: 881）と記述されており、以前は花嫁の出立は夜行われるのが一般的であるという認識であったことがうかがえる。今回特に詳しくお話をうかがった4軒のお宅では、どの家の嫁も、タクシーなどの自動車に乗って新郎宅に向かったようだ。結婚式には新婦の両親が出席する習慣がなかったため、多くの家ではここで両親と別れたが、兄弟や親せきのおばさんなどと家を出た。結婚式の途中にお色直しなどがあるため、髪結いさんを連れ立っていくことが多かった。

## ナワバリ

嫁を連れて一行が嫁ぎ先まで向かう道中、近所の人たちによって縄が張られていることがあった。これはナワバリと呼ばれており、縄を張っている人たちに対して祝儀を渡すことで、そこを通してもらう。ナワバリは「能登半島を中心として、山形県から鳥取県にいたる日本海域に

主に分布している」(江守 2002: 117) ようだ。『珠洲市史』には「嫁入りは夜が多い。それもなるべく人々が寝て静かになったら行くようにし、しかも、なるべく人のいない所を通るようにした。それは、道に丸太を置いたり、ナワバリをした青年女、子供らを避けるためである」(1979: 884) という記述があり、一見すると祝儀の強要をして嫌がらせをしているよ

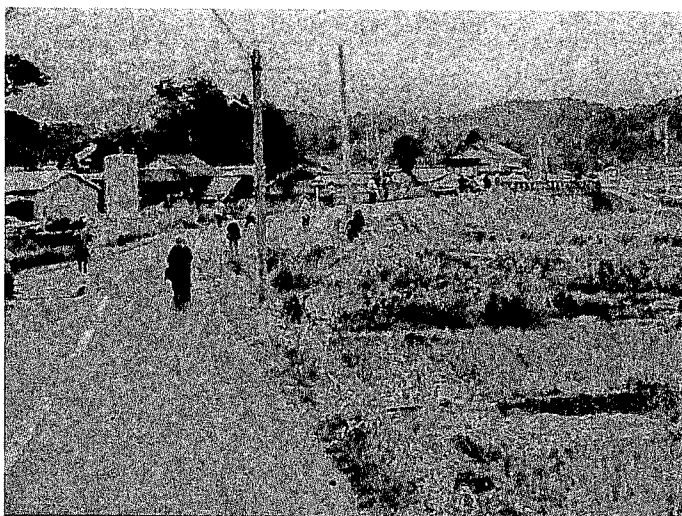


写真1 ナワバリの様子(昭和49[1974]年)  
聞き取りをしたお宅にて見せていただいた写真を筆者が撮影

うに見えるが、「この妨害行為は祝福の意味をもって、多くの人から妨害をうけるほど、嫁方が喜ぶという」(江守 2002: 117) という報告があり、また今回の調査でも「ナワバリが無いと歓迎されていないようで寂しいものだ」と語った人がいたことから、ナワバリは「嫁入りを邪魔してやろう」という悪意に満ちたものであるのではなく、「自分の在所への仲間入りを許す」という意図のもとに行われているものであることがわかる。

祝儀袋に入れる額は15円や105円、305円など幅はあるものの、基本的には「5円(ご縁)」が関係していた。また、ナワバリは新郎の家から近い側でしかなされないものであるらしく、嫁の実家に近い側は沿道に集まってきた人たちに祝儀を渡すだけで済み、祝儀は嫁の実家に近い側は新郎側が、新郎の家に近い側は新婦側が出すものであったと語る方が多かった。

ちなみに、このナワバリの行事は、中国北方諸民族のあいだで、近年まで広く行われていたものであるようだ。江守はその著書の中で、新疆ウイグル自治区のカザフ(ハ薩克)族の例を挙げ「カザフ族における縄張りでは、単に祝儀がせびられるだけでなく、歌を唄うことも要求されるのであるが、一九八九年に私が山形県の一農村、西田川郡温海町越沢で聴取したところでは、そこで行われている縄張りでも、やはり祝儀ばかりでなく、嫁入り一行に同伴する仲人に歌を唄わせることが同時に行われていた」(江守 2002: 118) としている。なお、同様の習俗は山形県の西南部から新潟県北部にいたる地域に分布していることも判明している。

#### 玄関前で

新郎の家につくと、「合わせ水」と「足洗い」が行われる家が多い。

合わせ水は、新郎側の水と新婦側の水とを一つの杯に入れ、新婦がこれを飲み、杯を地面に叩きつけて割るというものである。ただ今回の調査では、杯には水ではなく酒を入れたという家もあったり、杯を割るのは新婦ではなく髪結いさんであったりと、家々によって形式は少しずつ異なっていた。杯を割る行為には、結婚が一回きりでいいようにという願いが込められており、細かく割れるほど縁起がいいようだ。このことについては「日本の呪術的な婚姻儀礼の一つに、婚家に入る際の水飲みの儀礼がある。奥羽山脈の東側、関東地方西部、信州、北陸地方に分布している。(中略)嫁は差し出された一升枡の中から杯を受け取り、水を飲んだあと杯を地面に投げて割る。一生その家の水を飲むという願いをこめたものという」(江守 1984: 370)という記述があり、水を飲むという行為が多くの方で行われていたという事実があるものの、『珠洲市史』では「案外新しい風習かも知れない」(1979: 887)とされており、合わせ水という風習がこの地方でどの程度古くから行われているものなのかははっきりしない。今回の調査でも合わせ水をした記憶が無いという方がいた。

足洗いは、嫁入り先の玄関で新婦の足を洗うというものである。しかし、今回の調査で実際に足を洗ったという人はおらず、みな洗う真似だけをしてもらったそうだ。洗う真似をしてくれるのは近所の人や新郎の親類の人など様々であるが、決まって女性であった。

### 結婚式にて

足洗いを済ませると、すぐに新郎宅の神仏にお参りをする。お参りをするのは、新婦のほかにも舅、姑、仲人、髪結いさんなど、家々によって様々である。

新婦はこの後、白無垢から赤い着物に着替える。後述のCさんによると、これには新しい家で生まれ変わるという意味が込められていたようであるが、他の家では黒い着物に着替えたという話もあり、必ずしも赤い着物でなければならないというわけではないようだ。

そして出席者が会場に揃うと、おちつきの膳が出る。この膳には黒豆、紅白の餅、干しイワシなど3~4品ほどがのっている。今回お話を伺った家の方々に、「黒豆には『黒くなるまでまめに働け』という意が込められている」と教えていただいた。イワシは皿の上に背中合わせにのせられており、出席者たちはそのイワシを腹合わせにした。このイワシは基本的に食べないようであった。この後、三三九度と親子杯が行われ、本膳に移る。本膳には何種類もの料理がのせられており、のりきらない料理は二の膳と呼ばれる脚の短い膳にのせられた。こういった料理は近所の人たちによって作られたということであった。

出席者たちには、砂糖で作られた籠盛りのお菓子が用意されていた。リンゴやバナナなど7種類あった。また同様に砂糖で鯛を形作った「おざし」というものもあり、出席者たちは結婚式終了後に家に持ち帰って少しずつ食べた。宴会の最後には大杯が行われた。ある出席者が酒を飲み、

他の出席者が歌を唄う。酒の好きな人は大きな杯で酒を飲み、歌の好きな人は数回唄うということもあったようである。焼いた鯛をほぐして、それを肴にして酒を飲んだ。

ここまで終わると、たいていは夜が明けてしまう。この長丁場な結婚式の間、新婦は料理に手がつけられず、会場ではただ座っているだけであった。ときどきお色直しやトイレ休憩という名目で退出し、控え部屋でおにぎりなどを軽く食べたりしたそうだ。

### 3. 昭和 30 年代前半の結婚式

本節では、今回の調査で詳しくお話をして頂いた方々の事例を 4 つ挙げる。

#### A さん夫婦の事例（鈴木、B さん 70 代男性、C さん 70 代女性。昭和 31 [1956] 年結婚）

B さんと C さんはまたいどこであった。結納に関しては本人たちが直接関わらないため、結婚する際に結納があったかどうか、またどのようなものであったのかはわからないそうである。C さんは北海道で 3 年間ほど縫物の学校に通っており、結婚式で着用した自身の着物は、自ら縫ったそうだ。

結婚式当日、C さんは飯田で髪結いをした。夕方、仲人と B さんの姉が迎えに来て、飯田からタクシーで新郎宅へ向かった。家を出る際は、死に装束の意味を表す白無垢を着ていた。新郎宅に近づくと、ナワバリが沢山あった。お年玉を入れる袋のようなものに 105 円や 305 円を入れて用意しておき、それを渡して通してもらった。C さん曰く「100 (袋) や 200 (袋) では足りない」そうである。そのため、新郎宅に到着してから庭でお金をばらまくほどの余裕はなかったとのことだ。

新郎宅に到着すると、家の入口で合わせ水を行った。仲人が、新郎の家の水と新婦の家の水とを小さい杯に入れて、嫁に飲ませた。その杯は、嫁が地面に落として割り、割れなかった場合は仲人が代わりに細かく割った。

玄関で足洗いをした。これは仕草のみで、隣の家の女性にしてもらったそうである。この女性には仲人からタオルと寸志が渡された。ここで新婦は新しい足袋に履き替えた。C さんはここで赤い着物に着替えた。「白無垢を着ることで一回死に、赤い着物を着ることで再び生まれ変わることを表す」そうである。その後、舅・姑・新婦の 3 人で、蠟燭と線香とを持って新郎宅の神仏にお参りをした。この間出席者は昆布茶などで一服していた。結婚式には、C さんの母、おば、兄が出席し、B さん方の親戚は 10 人ほどであった。

出席者が座敷に集まり、おちつきの膳が出された。これは会式膳のような脚の短いもので、黒豆、紅白の餅、鶴の巣籠り、干しイワシの 4 品があった。黒豆は皿にばらばらに乗せられており、

箸でそれらの黒豆を中央に寄せた。鶴の巣籠りは、細かくそいだゴボウで鳥の巣のように形作り、その中にウズラの卵を2個入れたものである。なぜ卵を2個入れるのか尋ねたところ、「1つ（一人）じゃあ子どもがでкинやろ」とのことだった。干しイワシで腹合わせをした。新婦の分は仲人がひっくり返した。おちつきの膳の時間はそれほど長くなかったそうである。

Cさんはここで鶴や松などの模様がついている黒の紋付の着物に着替え、写真撮影をした。着物の中にはスルメイカと昆布とを半紙に包んだものを入れた。これは「いかにもよろこんぶ」という意味を込めているようだ。この当時は結婚というよりも嫁取りとしての性格が強かったために、この日は新婦が主役であり、新婦は床柱の近くに座った。「嫁さん床柱」という言葉があったそうである。最初に三三九度をする。Bさんは仕事でいなかったので、舅、姑と行った。赤い小さな杯で、親子杯も併せて行った。お酒は給仕人さんが次々と酌んでいってくれる。本膳にはいろいろな料理が乗っており、乗りきらない料理は横の二の膳に乗せてあった。各人の前には砂糖菓子の籠盛り（Cさんは「砂糖のカンカン菓子」と表していた）とおざしが用意され、新婦の前だけには反物一反とスルメイカ、昆布が乗った膳が準備されていた。やはり新婦は料理に手をつけることが許されず、たまに会を抜け出して控室で椅子に座って休み、少しご飯を食べた。

最後に大杯が行われた。出席者が交代で歌を唄い、交代でお酒を飲んでいく。このとき給仕人が、唄った人に対して、焼いてある鯛を一口か二口ぐらいずつ小皿に分けていく。この間、Cさんは別室に控え、椅子に座りながら食事をしたそうだ。

結婚式は夜通し行われ、ここまで終了した時点で明け方になってしまっていたため、出席した人の多くはそのまま新郎宅に宿泊した。

式が終わって一週間ほど経ったのち、夫婦で新婦の実家へ里帰りした。舅から紅白の餅や饅頭を持たされ、それらを新婦の実家周辺の家々に配った。新郎宅に帰るときは、舅から持たされた餅や饅頭の数を倍にして返さなければならず、Cさんはこれを「倍返し」と表していた。

#### **Dさん夫妻の事例（出田、Eさん70代男性、Fさん70代女性。昭和32〔1957〕年結婚）**

EさんとFさんとは、両親の共通の知り合いである仲人を通じての知り合い同士であった。お見合いをして、何回か顔合わせをした後に結婚した。Fさんは上戸の出身であった。結納の細かい手順はよくわからないが、結納金は8000円であったそうである。嫁入り道具は、結婚式の一週間前くらいに搬入した。

式当日の朝、タクシーでEさんの妹とおばが上戸まで迎えに来た。おばが「迎え女房」で、妹が「ネカヅキ（荷担ぎ）さん」であった。この二名は、お昼ごはんをFさんの実家で食べ、昼過ぎに新郎宅へ向かった。両親は結婚式に出席しない（できない）ため、髪結いさんと、Fさんの母の妹を連れ立って行った。それにFさんの妹も一緒にいたかもしれないそうである。白無垢に

角隠して向かった。

ナワバリはあった。新郎の家に着くまでに近所の人たちによって何回も縄が張られており、その度にタクシーを止めて、お金(50円や15円など)を払って通してもらった。家に着いてからも、午後2時くらいから仲人が5円ほどのお金をバラバラとまくので、それを目当てに、ナワバリでお金をもらった人たちはそのままタクシーについてきた。Fさんは「子どもは小遣い欲しいから走った走った」と語った。嫁の実家に近い方に縄は張られていなかったが、それでも人はいるため、祝儀をまいたり配ったりした。お金は、新婦の実家に近い方は新郎方が、新郎の家に近い方は新婦方が出すものだそうだ。

Fさんは合わせ水をした記憶が無く、もしかしたらその風習自体がなかったのかもしれないそうである。家に上がる際に足洗いをした。タライなどは用意されておらず、近所の女性に洗う真似だけしてもらった。その女性には祝儀を渡した。嫁と舅姑と3人で神仏参りをし、その後白無垢から赤い着物に着替えた。

座敷に10~15人ほどの親族が集まって、結婚式が始まる。このときEさんは結婚式の場にいた。おちつきの膳には干しイワシ、紅白の餅、黒豆が載せられていた。干しイワシは仲人の掛け声で各々腹合わせに直した。Fさんは「これで夫婦になったということを表す」と語った。ここで本膳の用意に移るため、休憩に入った。

休憩の後三三九度に移ったが、親子杯があったかどうかはよくわからないそうだ。この後、Eさんは奥に引っ込んだ。砂糖菓子・籠盛り・おざしは各人の前に用意されていた。また、Fさんの前には反物一反やスルメイカなどが載せられた膳もあった。大杯は本膳が始まるのと同様か、少し後に始まった覚えがあるそうだ。歌を唄うのがどうしても苦手な人は、とくに親戚ではない人でも歌の上手な人を結婚式に連れていき、代わりに唄ってもらうということもあった。

結婚式は夜が明けるまで続き、結婚式の後はおぼと二人で新郎宅に泊まった。その後、新婚旅行に出かけた。行先は和倉温泉であった。新婚旅行の後、出田地区の寺・神社にあいさつに出かけた。寺には舅に連れられて行き、酒とご祝儀とを持参した。神社には常に神主がいるわけではないので、次に地域のお祭りが開かれる際に一緒にあいさつをした。一週間後に実家へFさん一人で里帰りした。2~3日間と短いものだったようだ。新郎宅から持参した餅を近所の家々に配ってまわり、配った餅より多い数を新郎方に返した。

#### Gさん夫妻の事例(出田、Hさん70代男性、Iさん70代女性、昭和32[1957]年結婚)

Iさんは三崎の大屋出身で、二人は仲人の知り合い同士であった。Iさんの父と仲人との関係で縁談が進んだようだ。結納は親同士と仲人との間で済まされた。このとき結納金は大した額ではなかったそうだが、縁談が決まってから、新郎側から新婦側へ「帯料」を納め、代わりに新婦側

から新郎側へ「袴料」をお返しした。

結婚式当日、嫁入り道具を搬入した。午前10時頃に実家を出て、飯田で髪結いをした。仲人とHさんの姉、近所の人（あるいは親戚）がIさんを迎えに来た。Hさんの姉が「迎え女房」で、近所の人「ネカツキ」であった。タクシーで新郎宅へ向かう途中にはナワバリがあった。渡す祝儀の額については「親様が包むからよく知らん」ということだった。

新郎宅に着いたのは17時か18時くらいで、日暮れ前であった。家の入口で髪結いさんが茶碗に酒を酌んで、Iさんにこれを飲ませた。そしてこの茶碗を、髪結いさんが割った。玄関を上がる際、足洗いをした。水が少し入ったタライが用意されており、近所の女性が足を洗う真似をしてくれた。家の神仏には、Iさん、仲人、髪結いさんの3人で参った。神様の後に仏様に参るものだろう。その後Iさんは白無垢から赤い着物に着替えるため、控室に入った。このときに仲人が家の縁側からお金の入った袋をばらまいた。

新婦側からは、Iさんの母、親戚のおじやおば、Iさんの兄弟や父の兄弟などが出席し、全体の出席者は30人ほどいたようだ。出席者が席に着くと、干しイワシや黒豆などがのせられたおちつき膳が出された。三三九度や親子杯の際にはHさんは同席していたが、あとは「隠れとったのかもわからんな」ということだった。これらが終わった後、仲人が「これで三三九度が終わりましたので、イワシを腹合わせにしてください」と言い、出席者たちはイワシを腹合わせにした。黒豆は小皿に乗せてあり、つまんで食べたようだ。

その後、すぐに本膳に移った。Hさんによると、このときの雰囲気はざっくばらんなものであったようだ。籠盛り（Gさん夫婦は落雁菓子やカンカン菓子と呼んでいた）やおざしも用意されていた。ご膳は出席者一人ひとりの分が用意されていたが、これら籠盛りやおざしなどの引き出物の類は家一軒につき一つであった。反物などは特に用意されておらず、Iさんは「嫁が着物を用意してあればいいしね」と語っていた。

大杯は最後に行われた。杯は大中小の大きさがあり、大きいものはお酒が一升入程の大きさであった。上座から順々にまわり、歌付きであった。唄えない人は唄わなかったが、歌を唄うのが得意な人は「おれとあんた（の仲）やさかい、もひとつやってやるわ」と数回唄うこともあったそうである。鯛は焼いて、すでにほぐしてあった。

結婚式があまりに長いと、式の途中でIさんは疲れて眠くなってしまい、うとうとしているところを、隣に座っていたIさんの母に起こされた記憶があるという。

Iさんの両親は結婚式の前に、知り合いから振袖を4枚と帯2本を頂いてきたようだ。実家を出る際は白無垢、結婚式が始まる時は赤い着物で、結婚式の最中に紫、黒の着物に着替えた。黒の着物に着替えたときに記念写真を撮った。

結婚式の一週間から10日後に、Iさんは一人で里帰りをした。近所の人や親戚などに配る饅頭

を持っていったが、Iさんの親戚はとて多く、持って帰った饅頭の数は「500個や600個より多かった」ということだった。里帰りの期間は、5～6日であった。

### Jさん夫婦の事例（広栗、Kさん70代男性、Lさん70代女性、昭和33〔1958〕年結婚）

Lさんは上戸出身で、二人はいとこ同士であった。式前日に、嫁入り道具をトラックで運び込んだ。

式当日の昼、仲人と女性一人、Kさんの兄弟の方が迎えに来て、タクシーで新郎宅へ向かった。向かう途中、近所の人たちにナワバリをしてもらった。Jさん夫婦は「相手の在所に仲間入りさせてもらう意味がある」と教えてくれた。玄関先で、集まってきた人たちに対してお金の入った袋をばらまいた。

新郎宅の敷居をまたぐ際に合わせ水をし、嫁がこれを飲んでから茶碗を割った。「水を合わせるのは夫婦で仲良くやれるように、茶碗を割るのは結婚がこれ一回きりでいいように」との願いが込められていると語った。足洗いは、Kさんの姉と妹がしてくれた。タライは用意されていたが、水は張られていなかった。洗う真似だけしてもらい、祝儀を渡した。神仏へのお参りは、Lさんと仲人とで済ませた。その後Lさんは黒い着物に着替えた。その後Kさんが合流し、14時ごろに座敷での結婚式が始まった。Lさん方から出席したのは、親の兄弟やLさんの一番上の姉など、親類で5人くらいおり、他に部落の人が2人ほどであった。三三九度と親子杯は、KさんLさんと舅、姑の4人で一緒に行った。おちつきの膳には、餅、干しイワシ、黒豆がのっていた。おちつきの膳が出されると、出席者たちは各自で干しイワシを腹合わせに直した。

おちつきの膳が終わると、すぐに本膳へ移った。砂糖菓子の籠盛りやおごしはそれぞれの出席者に用意されていた。当然のように新婦は料理に手をつけられないため、ときどき席を立てて裏に引っ込み、おにぎりなどを少し食べたのだという。反物やスルメなどは、新婦の前に独立して用意されていたわけではなく、家の机の上に飾ってあったそうである。

大杯の際、給仕の人が酒を飲んでいる人に対して、焼いてある鯛をむしって小皿に入れて与えた。大杯は仲人から始まり、順々にまわる。唄がどうしても唄えない人のときは歌なしで、ということもあった。杯は大きさの異なるものが9つあり、酒が好きな人は大きな杯を選んだという。

結婚式は21時頃終了した。Lさんは、おぼと一緒に新郎宅に泊まった。おぼは翌朝、Lさんが新郎宅にいるのを見届けた後に帰宅した。この日、広栗6班に紅白の饅頭、風呂敷、酒（二合。お祝いをいただいた家には四合）などを配った。範囲が広いと、これらの配布は近所の人たちに頼んだようだ。ただしこれは2回目以降の嫁取り、婿取りの際には行わないことになっているようである。

結婚式の一週間後に里帰りをした。実家には一週間ほど滞在したようだ。新郎宅から餅などを

を持参したようだが、Jさんは、これを「倍返し」しなければならなかった、とは語らなかつた。

#### 4. 事例の比較・考察

第3節で記述した4軒は、いずれも昭和30年代の初めの時期のものであり、当時の各家での結婚式の形式の違いを共時的に見ることができる。この節では、上記の事例と後に掲げる各事例見比べ表を参考にしながら比較・考察を行いたい。

新郎新婦の関係であるが、またいとこやいとこ、仲人を通しての知り合いなど、かなり近いものであることがわかる。『珠洲市史』に「今の時代と違って、恋愛はおろか、男女が知り合う機会すら少なかった昔は、結婚はすべて親まかせであった」（1979: 871）とあるが、昭和30年代初めには、まだこういった形式の結婚が残っていたようだ。

嫁迎えの時間については、それぞれの事例で異なっている。新婦を迎えに来るのは、多くの場合仲人と新郎の女キョウダイである。ここに、近所の女性が加わる場合もあったようだ。このことについて皆さんにお聞きすると、「女が迎えに行くものである」というようにおっしゃっていた。足洗いに関しても、新婦の足を洗う真似をしてくれるのは、決まって女性であったそうだ。

この時代になると、さすがに新婦の家から新郎の家まで歩いていくという形ではなく、タクシーで向かう形になっている。それでもナワバリは存在し、縄が張ってあるといちいち車を停めて祝儀を渡したようだ。金額については各家でバラつきがみられるが、主として「5」のつく金額であった。

合わせ水に関しては、各家で形式が少々異なつた。両家の水を杯に合わせて嫁が飲み、その杯を嫁が割る形式ではなく、新婦が杯で酒を飲んで、髪結いさんがその杯を割るというものもあった。しかし、そもそも第2節で述べたように、この地域においては合わせ水の風習が案外新しいものなのかもしれないという報告があり、それを裏付けるように合わせ水をした記憶が無いという家もあったことから、固定化された儀式ではなかつたのかもしれない。

おちつきの膳の内容は、ほぼ同じ内容であるといえる。第2節で触れたように「黒くなるまでまめに働け」という意が込められた黒豆が4軒すべてで用意されていたことは興味深い。ここに嫁を労働力として考える「嫁取り」の考え方が如実に表れている。イワシの腹合わせは4軒すべてで行われている。

新郎の結婚式への参加は、家によってまちまちであった。Aさん夫婦の結婚式に関しては三三九度から新郎は出席していなかつたようだが、Dさん夫婦、Gさん夫婦の結婚式においては、新郎は本膳に移ったところで奥に引込み、Jさん夫婦の新郎は最初から最後まで結婚式に出席していた。

大杯は、結婚式の終わりに長い時間をかけて行うものである場合が多いようである。出席者は上座から「血の濃い」順に座り、大杯は、たいてい上座からまわされる。どの家でも、歌は付きものであった。

結婚式の終わる時間は、次の日の朝という家が多かった。これはもしかしたら、第2節で述べたように、今回取り上げた事例よりも昔に行われた結婚式は夜中に開始されていたことに由来するのかもしれない。

結婚式における一つひとつの事柄を検証したところ、4軒の間で目立った違いは見られなかった。これは、出田、鈴内、広栗の三地区が地理的に近いことが原因の一つであると思われる。また、今回の聞き取り調査でお話をして下さった方々が口々に「昔はそういうものだった」と語っていたことからわかるように、この地域における結婚式の形態がきっちりと決まりきっていたこともわかる。結婚式、あるいは嫁取りという儀式の中で、各家々の特徴を出す必要もなかったのかもしれない。恐らく昭和30年代に行われた三郷地区の他の結婚式は、これらの事例の内容と大きく変わらないものであると考えられる。

しかし広栗のJさん夫婦の結婚式においては、新郎は始めから終わりまで結婚式に出席し、結婚式は当日の夜9時頃に終了するなど、他の事例と比べて多少柔軟な部分が出てきていたことがうかがえる。恐らくこの後、結婚式に新婦の両親が出席するようになったり、家ではなく結婚式場で結婚式をしたり、といったような例が増えていき、現在の形の結婚式に近づいていくものと思われる。

現代においては、結婚は当人同士の意向によるところが大きいですが、少なくとも数十年前までは結婚の最終的な目的は「家」の維持にあったと考えられる。この場合の「家」とは「先祖から現在の自分を経て未来の子孫までをふくめた共同体」(宮川・宮下 1993:205)と定義されるが、第1節で言及したとおり、一昔前の結婚は「家観念」に強くとらわれたものであった。江守五夫は、このころの結婚について以下のように述べている。

「家格型」の村落では、村落社会における家共同体の価値づけ(=家格制)によって、婚姻が同等の価値づけの家柄(=同じ家格)同士で結ばれるべきだという家格内婚制規範が形成される。かつ家父長的家族構造の原理によって、婚姻は、既存の家共同体が「ヨメ」という一個の異分子をば吸収同化するところの作用として現れ、したがって家族員の配偶者の選択は、家共同体の支配者たる家長の専断的な権限事項とされる。婚姻の儀式は、一方において、自らの家格の高さ(=経済的優位性)を誇示すべく(potlatch的観念!)、他方において、「ヨメ」の「入家式」ないしは二つの家共同体間の姻戚関係の締結の儀式としての意義を強調すべく、盛大化の傾向を辿る。(江守 1990:351)

つまり一昔前の結婚は、まず結婚する両人の家柄が同等のものである必要があり、結婚相手の選定は本人たちではなく家長が行い、そして結婚式自体が「家」の誇示のために盛大に行われるものであったのである。今回は昭和30年代初めの事例について詳しく聞き取りを行ったが、これらの事例は上記の江守説からそう遠くないと感じた。三郷地区を含め、昭和30年以前の農村では、結婚するまで相手の顔を見たことがないということはよくあることであった。結婚の相手が親などに決められ、「家」の威厳を示すために豪華な結婚式を挙げた。しかし現在においては、このような形態の結婚はほとんど見られなくなっている。恋愛結婚が大半を占め、結婚式は結婚式場で行うのが普通になり、そして結婚は「家」のためにするものではなくなってきている。

今回の調査で頻繁に聞かれた「嫁取り」という聞き慣れない言葉の響きには、どこか祝いの雰囲気が無いような、もの悲しい雰囲気が漂うが、聞き取りを行った際は、とくに奥さん方が結婚式について楽しそうに語っておられた。今も昔も、結婚式が大きな意味を持つ行事であり、「家」にとってはもちろん、当人たちにとってもめでたいことであるということは変わらないのだということを実感した。

表1 結婚儀礼事例比較表

	鈴内 Aさん夫婦	出田 Dさん夫婦	出田 Gさん夫婦	広栗 Jさん夫婦
結婚年	昭和31 [1956] 年	昭和32 [1957] 年	昭和32 [1957] 年	昭和33 [1958] 年
新郎新婦の関係	またいここ	仲人の知り合い同士	仲人の知り合い同士	いここ
嫁入り道具の搬入	不明	式一週間前	式当日	式前日
嫁迎えの時間	夕方	朝	15～16時頃	昼
迎えに来た人	新郎の姉、仲人	新郎の妹、おば	新郎の姉、仲人、近所の人	新郎の女兄弟、仲人、女性
移動方式	タクシー	タクシー	タクシー	タクシー
ナワバリの有無、金額	あった。105円や305円	あった。15円や50円など	あった。金額は不明	あった
合わせ水に関して	あった。新婦が杯を割る	した覚えがない	酒。髪結いが杯を割る	あった。新婦が杯を割る
足洗い。足を洗った人	仕草のみ。隣家の女性	タライ無。近所の女性	タライ有。近所の女性	タライ有。新郎の姉、妹
神仏参りを行った人	新婦、舅、姑	新婦、舅、姑	新婦、仲人、髪結い	新婦、仲人
新婦側の出席者	母、おば、兄	母の妹、妹	母、おじ、おばなど	姉、おじ、おば、親戚
おちつきの膳	黒豆、紅白餅など4品	黒豆、紅白餅、干しワシ	黒豆、干しワシなど	黒豆、紅白餅、干しワシ
腹合わせに関して	新婦の分は仲人が合わせる	仲人の掛け声で一斉に	仲人の掛け声で一斉に	各々すぐにひっくり返す
三三九度など	新郎は不在。新婦、舅、姑	新郎は出席	新郎は出席	新郎、新婦、舅、姑
本膳	新郎は不在	新郎は不在	新郎は不在	新郎は出席
大杯に関して	結婚式の終わりに	本膳が始まるのと同時に	上座から	仲人から。唄なしの場合有
結婚式終了時間	明け方	明け方	朝8時頃	当日の夜9時頃

(聞き取りより筆者作成)